

次の文章は、小池昌代の小説「石を愛でる人」の全文です。まず5分間で速読してみよう。

趣味といってもいろいろあるが、山形さんの場合は、「石」であった。「石」を愛でることであった。そのようなひとを、一般に「愛石家」と呼ぶらしい。愛猫家とか愛妻家とか、考えてみれば、世の中には何かを愛して一家を構えるほどの人が結構いる。しかしアイセキカと聞いて、即座に石を愛するひととは、ちょっと思い浮かばなかった。

山形さんから「アイセキカ」友の会に入会しましたよ、と聞いたときは、えっ？ 愛惜？ と聞き返してしまった。山形さんは、そのころ奥さんを、病気でなくしたばかりのころだったから。山形さんが、石を愛するようになったのが、奥さんをなくしたことと関係があるのかなのかは、よくわからない。

わざわざ表明したことはないが、実はわたしも石が好きである。どこかへ行くと、自分の思い出にと、石を持ち帰ることが今までにもよくあった。

子供のころも、海や川へ行くたびに、小石を拾っては家に持ち帰ったが、当時は石よりも、石を持ち帰るという行為そのもののほうに、特別の意味があったようだ。

部屋に持ち込まれた石はきまって急速に魅力を失い、がらくたの一つになってしまった。そもそも水辺にある小石は、川や海の水に濡れているときは妙に魅力があるのに、乾いてしまうと、ただの石だ。濡れている色と乾いた色って、同じ石でも随分違う。水辺の石の魅力をつくっているものが、実は、石そのものでなく、水の力であったということなのか。

今、わたしの机の上には、イタリアのアッジで拾ってきた、大理石のかけらが四つある。イタリアの明るい陽に、きらきらと微妙な色の差を見せてくれた、薄紅、薄紫、ミルク色、薄茶の四つの石は、これは日本に持ち帰っても、不思議なことに色あせることがなかった。

一人である夜、疲れて心がざらついているようなとき、その石をてのひらのなかでころがしてみる。石とわたしは、どこまでも混ざりあわない。あくまでも石は石。わたしはわたしである。石のなかへわたしは入れず、石もわたしに、侵入してこない。その無機質で冷たい関係が、かえってわたしに、不思議な安らぎをあたえてくれる。

人間関係の疲労とは、行き交う言葉をめぐる疲労である。だから、言葉を持たない石のような冷やかさが、その冷たいあたたかさが、とりわけ身にしみる日々があるのだ。こうしてみると、わたしだって、充分、アイセキカの一人ではないか。

そういえば、生まれて初めて雑誌に投稿した詩が、「石ころ」というタイトルだった。夜の公園に残された石ころが、まるで、なにかをつかみそこねた、握りこぶしのように見えた。それだけのことを書いた幼稚な詩だったが。

子供のときは、道に石があれば、とりあえずは、足で

蹴ってみた。武器として、なにものかに向かって投げつけたり、水のなかに意味もなく、ぽちゃっと落としてみたり、拾って、それに絵を描いてみたり、積み上げたり、地面に印のかわりに、置いてみたり……。石ころとは、随分、多方面に渡って、つきあってきたものだ。

ひとと石との、こうしたあらゆる関係の先に、石をただ見つめるという、アイセキカたちの、透明な行為がひろがっているのだろう。

さて、そのアイセキカ、山形さんは、普段も石のように無口なひとである。ある地方テレビ局の制作部門に勤務している。おいくつですか、と尋ねたことはないが、五十歳はとうに過ぎているはずだ。

山形さんの担当するインタビュー番組に、わたしが出演させてもらったのが知り合うきっかけだった。実はわたしは、テレビのない生活をして、十年くらいになる。見たい番組というのが、ほとんどないし、たまに、人の家でテレビがついていると、テレビとは、こんなに騒がしいものであったかとびっくりする（特にコマーシャルが、ひどい）。

わたし、テレビ持ってませんから。——しかしそれは出演を断る理由にはならなかった。

わたしはこんな仕事をしてますが、テレビを持ってないのは、今では普通のことです、と山形さんは言った。しかし、見るのと出るのは、また違う。まあ、一度くらい、遊びにいらっしゃってはいかがです？

結局、その十五分番組に、わたしは出ることを決めた。オペラ歌手と評論家のインタビュアーを相手に、とても緊張しつつ、一生懸命になって、詩のことをしゃべり、朗読までして、収録を終えたのだ。

終わったあと、暗い夜道を一人で帰りながら、テレビとは、恐ろしく、自分を消費するものだと思った。インタビュアーたちとの関係も、あまりにも希薄で一時的・図式的なものであり、そんなことは彼らにとって、仕事のひとつなのだから当たり前のことなのに、その当たり前前に傷ついてしまった。

そのうえ、自分の言ったことが、終わったあとも、わんわんと自分のなかで反響している。詩人という肩書きで得意になってしゃべった自分——これは一種の詐欺であると思った。そのことを自覚したうえで、玄人としてりっぱに騙せたのならそれでもいいが、わたしは半分素人の様な顔をして、詩とは……とか、詩との出会いは…

…なんて遠慮がちに、そのくせ内心、とくとくとしゃべっていたのだから、なんだかタチが悪いような気がした。わたしのそんな落ち込みを、山形さんは、まあ、テレビに初めて出た人間はそんなもんですよ、と石のように表情のない顔で、のんびりとなぐさめてくれた。ここを通過するとね、もう怖くはありません。気をつけてくださいよ、テレビに出ることには、けっこう魅力があるよ

A（原文1～56行目） 傍線部の「言葉を持たない石のような冷やかさが、その冷たいあたたかさが、とりわけ身にしみる」とは、どういうことか。話し合ってみよう。

趣味といってもいろいろあるが、山形さんの場合は、「石」であった。「石」を愛でることであった。そのようなひとを、一般に「愛石家」と呼ぶらしい。愛猫家とか愛妻家とか、考えてみれば、世の中には何かを愛して一家を構えるほどの人が結構いる。しかしアイセキカと聞いて、即座に石を愛するひととは、ちょっと思い浮かばなかった。

山形さんから「アイセキカ」友の会に入会しましたよ、と聞いたときは、えっ？ 愛惜？ と聞き返してしまった。山形さんは、そのころ奥さんを、病気でなくしたばかりのころだったから。山形さんが、石を愛するようになったのが、奥さんをなくしたことと関係があるのかないのかは、よくわからない。

わざわざ表明したことはないが、実はわたしも石が好きである。どこかへ行くと、自分の思い出にと、石を持ち帰ることが今までにもよくあった。

子供のころも、海や川へ行くたびに、小石を拾っては家に持ち帰ったが、当時は石よりも、石を持ち帰るといふ行為そのもののほうに、特別の意味があったようだ。部屋に持ち込まれた石はきまって急速に魅力を失い、がらくたの一つになってしまった。そもそも水辺にある小石は、川や海の水に濡れているときは妙に魅力があるのに、乾いてしまうと、ただの石だ。濡れている色と乾いた色って、同じ石でも随分違う。水辺の石の魅力をつくっているものが、実は、石そのものでなく、水の力であったということなのか。

今、わたしの机の上には、イタリアのアッジで拾ってきた、大理石のかけらが四つある。イタリアの明るい陽に、きらきらと微妙

な色の差を見せてくれた、薄紅、薄紫、ミルク色、薄茶の四つの石は、これは日本に持ち帰っても、不思議なことに色あせることがなかった。

一人でいる夜、疲れて心がざらついているようなとき、その石をてのひらのなかでころがしてみる。石とわたしは、どこまでも混ざりあわない。あくまでも石は石。わたしはわたしである。石のなかへわたしは入れず、石もわたしに、侵入してこない。その無機質で冷たい関係が、かえってわたしに、不思議な安らぎをあたえてくれる。

人間関係の疲労とは、行き交う言葉をめぐる疲労である。だから、言葉を持たない石のような冷やかさが、その冷たいあたたかさが、とりわけ身にしみる日々があるのだ。こうしてみると、わたしだって、充分、アイセキカの一人ではないか。

そういえば生まれて初めて雑誌に投稿した詩が、「石ころ」というタイトルだった。夜の公園に残された石ころが、まるで、なにかをつかみそこねた、握りこぶしのように見えた。それだけのことを書いた幼稚な詩だったが。

子供のときは、道に石があれば、とりあえずは、足で蹴ってみた。武器として、なにかに向かって投げつけたり、水のなかに意味もなく、ぽちゃっと落としてみたり、拾って、それに絵を描いてみたり、積み上げたり、地面に印のかわりに、置いてみたり……。石ころとは、随分、多方面に渡って、つきあってきたものだ。

ひとと石との、こうしたあらゆる関係の先に、石をただ見つめるという、アイセキカたちの、透明な行為がひろがっているのだろう。

B（原文57～127行目） ※～※の部分ついて、わたしの山形さんに対する見方、感じ方は、時間とともに変化しています。山形さんの人物像について、話し合ってみよう。

※さて、そのアイセキカ、山形さんは、普段も石のように無口なひとである。ある地方テレビ局の制作部門に勤務している。おいくつですか、と尋ねたことはないが、五十歳はとうに過ぎているはずだ。

山形さんの担当するインタビュー番組に、わたしが出演させてもらったのが知り合うきっかけだった。実はわたしは、テレビのない生活をして、十年くらいになる。見たい番組というのが、ほとんどないし、たまに、人の家でテレビがついていると、テレビとは、こんなに騒がしいものであったかとびっくりする（特にコマーシャルが、ひどい）。

わたし、テレビ持ってませんから。——しかしそれは出演を断る理由にはならなかった。

わたしはこんな仕事をしてますが、テレビを持ってないのは、今では普通のことです、と山形さんは言った。しかし、見るのと出るのでは、また違う。まあ、一度くらい、遊びにいらっしゃってはいかがですか？

結局、その十五分番組に、わたしは出ることを決めた。オペラ歌手と評論家のインタビュアーを相手に、とても緊張しつつ、一生懸命になって、詩のことをしゃべり、朗読までして、収録を終えたのだ。

終わったあと、暗い夜道を一人で帰りながら、テレビとは、恐ろしく、自分を消費するものだと思った。インタビュアーたちとの関係も、あまりにも希薄で一時的・図式的なものであり、そんなことは彼らにとって、仕事のひとつなのだから当たり前のことなのに、その当たり前のことに傷ついてしまった。

そのうえ、自分の言ったことが、終わったあとも、わんわんと自分のなかで反響している。詩人という肩書きで得意になってしゃべった自分——これは一種の詐欺であると思った。そのことを自覚したうえで、玄人としてりっぱに騙せたのならそれでもいいが、わたしは半分素人の様な顔をして、詩とは……とか、詩との出会いは……なんて遠慮がちに、そのくせ内心、とくとくとしゃべっていたのだから、なんだか、タチが悪いような気がした。

わたしのそんな落ち込みを、山形さんは、まあ、

テレビに初めて出た人間はそんなもんですよ、と石のように表情のない顔で、のんびりとなくさめてくれた。ここを通過するとね、もう怖くはありません。気をつけてくださいよ、テレビに出ることには、けっこう魅力があるようですからねえ。みんな、そう言いますよ。こいけさんもそのうちね——と山形さんは言った。——ぜったいテレビにどんどん出たくなりますよ。そう、自信を持って決めつけるのだった。

その山形さんから、「石を出品しましたので、ぜひごらんください」という、薄いぺらぺらのはがきの案内状が届いたのは、東京に梅雨入り宣言が出された日のことだった。さらに追い討ちをかけて電話までかかってきて、石はいいですよ、ぜひ、見に来てくださいよ、何日と何日なら、わたしも行ってますから、と。

その、動かぬ大山のような山形さんの言い方には、断られることなど、おのれの辞書にはないというようなずうずうしさがあつた。

「わかりました、じゃあ行きますよ（行けばいいんでしょ）。わかりましたよ（まったくもう）」

このわたしの返答も、充分すぎるほど失礼な言い方ではあつたが、山形さんは、ともかくもわたしが行くと言えど、うむ、と満足げにうなずいて日取りを決め、それじゃあ、と言って電話を切った。※

当日は雨だった。しかし石を見に行くのにはいい日のように思われた。傘というものがわたしは好きだ。ひとりひとりの頭のうえに開き、ひとりひとりを囲んでいる傘が。そういえば、寂しい、独りきりの傘のなかを、華やかな世界と表現した女性の詩人がいたなあ。彼女もまた、雨の日と、傘が、好きだったのだろう。五十を過ぎて、彼女は突然自殺してしまった。顔に刻まれた深い皺が、とりわけ素敵な美しいひとだった。

そんなことを思い出しながら、会場についた。表参道の小さなアトリエである。傘の露をふりはらって、ドアを開けた。

C (原文128~194行目) 傍線部「何かを何かを少しずつひっばっている」とは、何が何をひっばっているのだろうか。話し合ってみよう。

当日は雨だった。しかし石を見に行くのにはいい日のように思われた。傘というものがわたしは好きだ。ひとりひとりの頭のうえに開き、ひとりひとりを囲んでいる傘が。そういえば、寂しい、独りきりの傘のなかを、華やかな世界と表現した女性の詩人がいたなあ。彼女もまた、雨の日と、傘が、好きだったのだろう。五十を過ぎて、彼女は突然自殺してしまった。顔に刻まれた深い皺が、とりわけ素敵な美しいひとだった。

そんなことを思い出しながら、会場についた。表参道の小さなアトリエである。傘の露をふりはらって、ドアを開けた。

期待したとおり、ずらっと小石どもが並んでいる。それぞれの石の前には、産地の名前と、出品者の名前が毛筆で書いてある。産地というのは、平たく言えば、石を拾った場所、出品者というのは、拾ったひとの名前だろう。そう考えると、石を愛するという趣味は、実にシンプルでいいものと思った。拾った、拾われた、その一瞬にすべてをかけて展示しているのであるから、ここにあるのは、どれもが人生の瞬間芸のようなものと言える。

入り口のところには、パンフレットがあって、そのなかに「水石の魅力」という短い文章が書かれてあった。ただの石だと思っていたが、こういうのを、水石というらしい。始めて知った言葉である。

ここは、まるで、河原のようなところだ。石ばかりでなく、言葉も拾うのだ。

さっそく、パンフレットを読んでみた。

「水石は、趣味のなかでも、もっとも深淵で奥の深いものだといわれています。盆栽などとあわせて鑑賞されることも多いのです。

庭石のような大きなものでなく、片手で持てるような小さな鑑賞石をいいます。あなたも、水石の世界に、どうぞひととき、お遊びください」

アトリエは薄暗く、それぞれの石に、柔らかいスポットライトが当てられている。ひとの姿も二、三、ある。どのひとも、みな、一人ぼっちである。石が好きなのだろうか。彼らもまた、アトリエ内に、飛び石のように、存在している。

そこへドアが開いて、山形さんが入ってきた。

(ああ、山形さんだ)
とわたしは思った。思っただけで、声にはならなかった。

(山形さん、わたし、来ましたよ)

これもまた、声にならず、表情だけで、山形さんに訴えることになった。まるで石が、あらゆる声を吸い取ってしまったようである。

山形さんも、わたしにすぐに気がついてくれたが、山形さんも、声を出さない。目を細くして、

(ああ、よく来てくれました、むし暑いのに、悪かったですね。ゆっくり見ていってくださいよ、あとでお茶でもいかがですか)

そんなことを言う。違うかもしれない。でも、そのときは、きっとそんな気がしたのである。

沈黙の空気を味わいながら、わたしは、いつしか、山形さんが出品した石の前にいた。

まるまるとした真っ黒な楕円形。滋賀県瀬田川・山形寛。そんな文字がプレートに書いてある。じっと見ていると、背後から、

「よく来てくれましたね、暑いのに」
と声が出た。山形さんだ。なんだかすでに聞いたような言葉をしゃべっている。

その、確かに実在する男の声は、不思議な浸透力を持ってわたしの身体に入ってきた。久しぶりにひとの声を聞いたと思った。まるで、ついさっきまで、わたしは石であり、その声によって、ようやく人間に戻ったというような、どこかほっとする、あたたかい声だった。

山形さんの顔は、日に焼けて、真っ黒だ。おまけに、何をしていたのか、汗だらけの顔である。目があった。出品された石と、良く似た漆黒の瞳である。雨が降っているせいか、しっとりとしている。こんな目を山形さんは持っていたのだろうか。決して強い目というのではない。疲れはてていて、むしろ気弱な目だ。こんな目を山形さんはしていたのだろうか。石に惹かれている山形さんが、そのとき少しだけ、わかったような気がした。

自分でもわかには信じられないことだが、わたしもそのとき、山形さんに、心を惹かれていたのかもしれない。何かを何かを少しずつひっばっている、その日は、そんな感じの日であった。

原文195行目～（エンディング）

それから、ドアを押して外に出た。雨はまだ降っている。

「この先のビルの二階に、できたばかりの洋風の居酒屋があるんです。石を見たあとの一杯もいいですよ」
何も答えないでいると、

（じゃあ、いきましょう）

と、山形さんが言った（ように思った）。

言葉を使わないと、わたしたちもまた、石のようなものだ。何を考えているか、わからない。互いにくろがって行くほかはない。石もひとも。くろがり、ぶつかりあって、わかりあうしかない。そう考えながら歩いていくと、

「ここですよ」

と山形さんが立ち止まる。古いビルディングの前である。それからくると背中を見せ、細く暗い階段をのぼっていった。わたしも彼の後に続いた。

足元がようやく確かめられるほどの、ぼんやりとした光線がふりそそいでいる。いま、この階段をのぼっていることを、覚えておこうとわたしは思った。やがて山形さんが、店のドアを押す。中から、サククスとピアノの音が、あふれるように、外へ流れ出た。